

けものみち

(音信不通 ⑥)

奈良 敏行



「けものみち」という言葉が気になるのだがなぜだろう。ビオトープとどんな関係があるのだろう。立ち位置としてみれば、双方に共通するのはオルターナティブ(もう一つのもの)という性格かもしれない。

本道からはずれたものを、けものみちという。人の生活道路と生態系を別にした、生き物がふみならした道のことだが、ありえたオルターナティブの可能性として、比喩としても用いられる。ソローの世界を借りると、村(公共の場)は公道(ハイウェイ)がふくらんだものだ。公道がふくらんで公共の場ができるとき、とりこぼされていくものがある。そのとりこぼされたものにこだわるとき、「けものみち」(ウォーキング)という言葉が生まれる。ソローの

ワールドでいえばウォルデン池だ。けものみちがふくらむと何ができるのだろう。「市民の不服従」だろうか。わたしは、けものみちのイメージをこう考える。道が左右に分かれている。この分岐点でどのような選択をするか。左でも右でもなく「真っ直ぐ」往く。この仮構に「けものみち」がある。公道でないオルターナティブなものだ。けものみちがふくらむとどうなるだろう。ふくらむというのはわかりにくい言葉だが、きつと小さな広場ができる。広場といういい方は、でも、けものみちにふさわしくはない。結果というのはどうだろう。真っ直ぐに往くというのは、左右の路を選ぶことによって、取りこぼされるもの、ふり落とされるものを手放さない、という決意だ。

生き物の小さな生態系の場をビオトープという。ビオトープの特性の一つに多孔性というのがある。ビオトープとは結界のことだ。いくつかがことながら重なり、支え合うことよって成立する場だ。この場にはたくさん孔(アナ)が存在する。孔の出口はこの広場を共有している。しかし孔の内部の形や反対側の出口がもしあればだが、それは多様に異なる。反対側の出口が公道に通じるものだとすれば、こちらの孔(アナ)は、けものみちに扉を接している。オルターナティブ方向への出口なのだ。こんな二つの出口を持つ生活が可能だろうか。しかし、本を読んで暮ら

すというのは、そういうことだと思う。本のビオトープと
いう言葉でつくり上げようとするとする広場は、そのような多孔
性の風景だ。逆にいえば、そのような多孔性の風景を本の
ビオトープと呼んでみる。

多孔性というのは、読書がそのような性質のものである
ということだ。読書は深めれば深めるほど人を孤独にする
。分かれるということとは、自分仕様にカスタマイズしてい
くということだからだ。左の路を選ぶか右の路を選ぶか、
この理路は説明できる。しかし真つ直ぐ選ぶということは
阿吽の呼吸であって、説明はできない。だから路を進めれ
ば進めるほど、孤独な了解にわけ入ってしまう。この阿吽
も比喩的に「けものみち」と名付けてみる。

ここで、本のビオトープとは、狭くいうことになってし
まうが、本屋をめぐる話のことだ。一人ひとりの孔(アナ)
を通り抜けて、店頭へ足を運ぶ。楽しいこと、何かいいこ
とがあると期待するから扉を押す。この何かいいこと楽し
いことを、「本屋の青空」といつてみたことがある。孔を
抜けて、ビオトープに顔を出せば、青空と出合う。この青
空の一つに、いまは「音信不通」と名付けてみる。趣旨は
副題にあるように、本のビオトープだ。

読書を深めれば孤独も深まる、と述べた。別に悪いこと
ではない。朝に道を聞かば夕べに死すとも可なりと古人は

いう。ここには探求に値する「主題」がある。一方ビオト
ープの孔から顔を覗かせれば、読書のオルタナティブに出
合う。例えていえば、本が好きだところには、「主
題」が見える。一方本が好きの人が好き、には「きっかけ」
の多様性がある。きっかけというのは、何かと何かの関係
性のことだ。人と人とのことでいえば「縁」という言葉に
なるだろうか。

人にひきつけて語れば、「けものみち」とは「人の縁」
の展開だ。路の入口を同じくしても、人が必ずしも同じ出
口に至るとは限らない。左右の路を選ぶのは自分だが、真
つ直ぐへ、と誘うのは「人の縁」だ。あるいは一冊の書物
の著者であるかもしれない。この縁と「きっかけ」とは同
じことの別の言い方だ。この「きっかけ」に耳を傾け、書
棚に反映していくのは、街角の本屋の仕事かもしれない。
そして「主題」よりも「きっかけ」、つまり本が好きなが
が好きという阿吽を重視する人たちを「本屋的人間」と呼
んでみる。けものみちに一並びする人生のオルタナティ
ブな何事かの物語だ。

(参考)

ソロー 『市民の反抗』 岩波文庫 1997

2016.12.31